

## 「渤海と古代の日本」

講師 國學院大學栃木短期大学  
教授 酒寄 雅志 氏

### 1. 渤海の民族問題

渤海に関してはほとんど史料が残っていないので、かつては「幻の王国」と呼ばれていた。その場所は、北朝鮮の平壤以北、鴨緑江からアムール川の南側ぐらいで、戦前の満州国とほぼ重なっている。日本と満州の歴史は、「1300年前の日本と渤海の歴史にさかのぼる」という言い方がある。従って、戦前は渤海史の研究が盛んに行われていたが、満州国の消滅とともに日本では中国東北地方への関心が急速に失われた。



しかし、今日、韓国や朝鮮、中国では、渤海史の研究は国家の威信をかけた問題である。中国の『旧唐書』に記されている「渤海靺鞨の大祚榮は、本高麗の別種なり」に基づけば、渤海は朝鮮民族の国家になるが、『新唐書』の「渤海、本粟末靺鞨にして高麗に附す」という記述に従えば、渤海は高句麗に従っていた靺鞨族の国であり、中国の東北地方に誕生した国家ということになる。つまり中国は1990年代から2000年代にかけて、渤海史は中国史の一部という主張を強めている。その主張に対して、韓国は中国に抗議し、両国にとって国家を挙げた歴史観の問題になっている。

ちなみに、渤海があったのは大変広い地域なので、そこに住んでいた靺鞨にはさまざまな種族が存在した。黒水靺鞨はアムール川辺りに住んでいた人たちであり、粟末靺鞨とは南の方に住んでいた人たちである。この黒水靺鞨の後裔が清朝、愛新覺羅氏で、ラストエンペラーといわれた愛新覺羅溥儀につながっていく。渤海はこうした靺鞨諸族が結び付いてできあがった多民族国家であった。

### 2. 渤海の成立と展開

渤海は最初、振(震)国と名乗っていたようである。その振(震)国が成立したのは、698年、大祚榮によって政権が樹立された。668年に唐が高句麗を滅ぼした後、強制移住させられた高句麗人や靺鞨人のうち、営州(現遼寧省朝陽)に移された人たちが、その地を

支配していた漢人の都督を殺害したことを契機に、營州を捨てて元の故郷である「旧国」に移住することになる。旧国（現吉林省敦化）というのは、渤海の初期の都と言われる。

渤海と名乗るようになったのは、713 年、唐の玄宗皇帝が新しく興った国に渤海郡王という称号を与えたことに由来する。そのときの使者が崔忻（訴）（さいきん）で、その崔忻が建立したと言われる旅順の「鴻臚井の碑」によりそれが裏付けられる。ちなみにこの石碑は、日露戦争の戦利品として、現在、皇居内に収められており、一般の人には公開されていない。

渤海の第 2 代王大武芸（武王）は、「大土宇を斥（ひら）く。東北の諸夷、畏れこれに臣す」と『新唐書』にあるように、その領域を拡大した。それを脅威に思ったのが黒水靺鞨であった。黒水靺鞨は 726 年には、渤海の領土を通して唐へ使者を派遣し、軍事顧問としての唐の役人の派遣を要請した。そこで渤海は、「必ず是、唐家と謀を通じ、腹背より我を攻めるなり」と危機感を増大させ、727 年に日本へ遣使を行った。これが日本と渤海の交流の始まりである。当時、日本と朝鮮半島の新羅の関係は悪くなっていたため、渤海は日本が新羅にプレッシャーをかけることを期待したのであろう。

しかし、当時、新羅と唐は関係が良好であったので、唐から新羅に渤海征討の命令が下る。それを受けて新羅は 733 年渤海を攻撃するが、渤海の南境は山も高く険しく、雪も深かったため征討は失敗した。その上、渤海が最も頼りにしていた遊牧民族の国家突厥は内部紛争が起こったのである。そのため渤海は 735 年、唐突に唐に謝罪して朝貢を再開する。

こうして唐との安全保障を確立した渤海は、737 年に第 3 代の王大欽茂が即位すると、北方の民族の服属を進めるようになった。それに伴い北方諸民族が唐への朝貢をやめていく様子が『新唐書』に記されている。ただし、黒水靺鞨に関してそのような記録は残っていないので、最後まで服属しなかったと思われる。

### 3. 「海東の盛国」時代から滅亡まで

渤海が広大な領域を支配するようになると、国家としての自信も出てきたのであろう。王都上京の建設に取り掛かっている。また、唐もこれまでの郡王から上位の国王号を、762 年に大欽茂に与えた。そして、775 年ごろから次第に交易も活発化する。それは、755 年から 763 年にかけて唐で起こった安祿山と史思明の乱が、唐王朝を揺るがしたばかりか、東アジアの社会・経済構造も一変し、それを契機に経済活動も活発化したのであった。

渤海は、9 世紀には「海東の盛国」と言われるほどに発展を遂げた。特に 818 年に第 10 代大仁秀が即位すると、『遼史』に「渤海王大仁秀、南は新羅を定め、北は諸部を略す」と記されているように、さらなる領土拡大を図っている。その後、897 年には唐の朝廷で新羅と席次を争い、渤海王子大封裔を新羅の上席に着けるよう唐に要求するなど、国家の自信をうかがわせる。

しかし、907 年に唐が滅びると、渤海も急激に衰退の方向に向かう。唐の滅亡により台

頭した遊牧民族である契丹の耶律阿保機が、925 年には「惟うに渤海の世讎（せしゅう）いまだそそがず。豈に宜しく安駐すべけんや。乃ち兵を挙げ、親から大を征む」と渤海征討を命令したと『遼史』は記している。渤海にとって契丹の最前線である扶余府を包囲された第 15 代王の大諲譔は、僚属 300 余人を伴って遼に降伏し、渤海は滅亡する。このときに渤海に関する史料類が全部焼けたと思われる。

#### 4. 日本と渤海の交流

日本海を通じた大陸との交流が一番盛んだったのは、この渤海の時代である。727 年に第 1 回目の渤海使高齊徳一行が来日するが、日本は新羅を北方から牽制する勢力として渤海に期待し、その来日を歓迎した。以降、919 年まで、渤海から日本への遣使は 34 回、日本から渤海への遣使は 13 回に及ぶ。

日本と渤海の間には、軍事同盟があったのではないかと推測している。758 年に唐の安祿山の乱が伝えられると、当時の権力者であった藤原仲麻呂（恵美押勝）は渤海と連携して新羅を討とうとして、759 年 6 月に、新羅征討を発表している。ただ、それは日本一国ではできないため、渤海と連携することが必要であった。ちょうどそのころ渤海の使節の来日も活発になっている。しかし、その計画を実施するより先に藤原仲麻呂自身、政権維持が危うくなり、764 年には道鏡との権力闘争に敗れて、仲麻呂は琵琶湖のほとりで敗死する。

藤原仲麻呂の死と安史の乱以後、渤海との交流は貿易が中心となっていく。特に 771 年には、大使壺万福ら 325 人が 17 隻の船で来日しているが、これには多数の商人が同行していたと思われる。渤海使はそれ以後も頻繁に来日し、796 年には渤海が来日の間隔の裁定を日本へ要求する。日本は、798 年に「六年一貢」を渤海に提示したところ、渤海は満足せずに、さらに来日の間隔を短くすることを要求したので、日本は 799 年、「年限を労することなかれ」と、来日の間隔の制限を完全に撤廃した。

そうすると、渤海使は、809 年、810 年、814 年、818 年、819 年、821 年、823 年、825 年、827 年と続けてやって来る。それで 824 年には、右大臣藤原緒嗣が、渤海使を「実には商旅にして、隣客とするに足らず。彼の商旅をもって客となすは国の損也」と断ずるに至った。しかし、実はその大臣達自身が貿易を率先して行っており、本来禁止されていた私的交易が空洞化していたと考えられる。そこで、同年「一紀（12 年）一貢」に制限している。従って、861 年に来した李居正や 876 年の楊中遠らは、違期の来日を理由に入京を許されていない。しかし内情は、「必ず遠物を愛でる」とされるように、百姓・王臣家の使者・国司らは、渤海からの舶来品を競って購入していたと思われる。

一方で、古代の日本人は、外国人に対して恐怖感も感じていた。863 年正月「内宴を停む。天下、咳逆病を患（わずらう）を以てなり」、865 年「去年の天下咳逆病を患うがため。今年の内外疫気の萌（きざし）あり」とあるように、伝染病がまん延している記事が見ら

れる。しかも 872 年正月には、「是月。京邑に咳逆病を發す。死亡する者衆（おお）し。人の間に言う。渤海客来る。異土の毒氣しからしむる」と、渤海人は咳逆病などの伝染病を持ってくと異人と認識されていたのである。この「咳逆病」とは、今日のインフルエンザではないかと考えている。

## 5. 渤海使の航路と来着地

渤海使の来日の航路として一つ考えられるのは日本道である。『新唐書』に「竜原の東南は海に瀕す。日本道なり」とあるが、日本への起点となるのはロシアのクラスキノ土城だと考えられる。渤海の都、上京を出て山中を通り、東京の竜原府を通り、クラスキノ土城からポシェトラ湾に出て日本に来るのがメインルートだろう。クラスキノ土城から船出した後は、冬期の北西の季節風と日本海西岸を南下するリマン海流に乗っていったん朝鮮半島の東岸沿いに南下し、リマン海流から対馬海流に乗り換えて日本列島に沿って北上して、能登半島への着岸を目指す。能登半島に引っ掛からないと大変で、「夷地志理波（しりば）村」とあるような蝦夷地、すなわち北海道かと思われるところに着いたという記録もある。

ただ日本の外交の窓口はあくまで大宰府であった。日本側としては、能登半島や秋田、北海道などへ行かれると困る。従って、渤海使は南の朝鮮半島北部から出航している例もある。しかし、うまく大宰府に着くことができなかった。結果的に「越前国加賀に安置」とあることから、石川県辺りに着くことが多かったようだ。

渤海使の統計を調べていて一つ興味深いことは、34 回来日しているうち、前期は 1 隻 20 人前後で来日したのが、中期に 60 人前後になり、後期には 100 人以上になっていることである。これは、渤海使の乗る船の大きさを反映しているのではないか。『類聚国史』には、「則ち送使の数、廿を過ぎず。茲を以て限と為す」とある。また、その前段に「而るに巨木の楡材の土の長じ難し」と、大木の楡材が育たないと述べている。この楡材とはクスノキでないかと考えるが、渤海では楡材が育たないため、大きな船が造れず、来日する使節の人数も当初は 20 人と少なかったのである。しかし 823 年以降、100 人を超える使節を定期的に派遣するようになったのは、渤海で大型船の建造が可能になったからだと考えられる。

ところで日本の遣唐使船は、1 艘平均 140 人前後が乗っていた。渤海使は後期になると 105 人で来るようになっていてところから考えると、日本が遣唐使船の建造などで培った大型船を造る技術を渤海に教えたか、大型船を与えたことによって渤海の造船技術の革新が進んだのではないか。『類聚国史』には、815 年に渤海使王孝廉ら、帰国に際し乗船が破損したため「越前国に命じ大船を擇（えら）ぶ。蕃客を駕するなり」の記事が見える。また、883 年の陽成天皇の勅には「能登国をして羽咋郡福良泊山木を伐損するを禁ぜしむ。渤海客北陸道岸に著するの時、必ず還船を此の山にて造る」とある。さらに、大伴家持の「鳥総立て 船木伐るといふ 能登の島山 今日見れば 木立繁しも幾代神びそ」という

有名な和歌も多分能登半島辺りがそういう船を造る技術を持っていたことを示していると思う。能登国分寺出土の木簡に「上日郷戸主舟木浄足戸□□」とあるのも、能登の造船集団の存在をうかがわせる。

前半期の着岸地は出羽から越前国の沿岸だった。興味深いことに、8 世紀の秋田城跡から出土した水洗便所とも言える遺構から豚食をうかがわせる有・無鉤状虫の卵が検出されている。日本列島で豚食をするのは、北海道のオホーツク文化の人々だけなので、秋田城のトイレ遺構は渤海使が秋田に安置された証拠ではないだろうか。

能登と渤海の関わりは深い。『日本後紀』には、804 年の記事として、「比年渤海国使来着、多く能登国に在り。停宿の処疎陋すべからず。宜く早く客院を造るべし」とあり、能登客院が造られたことをうかがわせる。また、762 年に渤海へ派遣された船名を「能登」号と言う。さらに、772 年に「渤海使壺万福ら、能登国福良津に安置」という記事もある。この能登客院の候補地としては、かつて寺家遺跡が挙げられたが、この遺跡は多分気多大社に関係する寺社遺跡だと思われるので、まだその所在は不明である。ともあれ能登と渤海の関わりは深い。

また、「松原客館」も、『延喜式』に「凡そ越前国松原客館は、氣比神宮司に検校せしむ」と出てくるの現在の敦賀市に想定できるが、これも場所が確定されていない。今、敦賀の別宮神社というのが想定地の付近にあるが、決定的な証拠はまだ見つかっていない。

もう一つ興味深いのは、石川県津幡町の加茂遺跡出土の過所木簡には、「往還人」の名前が見られる。ここには北陸道が通っていることから、役人に連れられた百姓たちに道路の清掃を指示したものと思われる。「路傍の死骸を埋葬して、渤海使の入京に備える」という史料もあるので、それに関わるのかもしれない。

また、金沢市の畝田・寺中遺跡などからは、渤海関連とは言えないまでもいろいろな木簡や墨書土器が出てきている。「天平 2 年」とある墨書土器は、第 1 回の遣渤海使である引田虫麻呂が越前国加賀郡に帰国したことと関わりがあるのかも知れない。さらに、「津司」すなわち港の役所と記された墨書土器も発見された。また、金沢市戸水 C 遺跡発見の墨書土器に「津」と記されていたことや、畝田ナベタ遺跡から外国製と思われる帯金具が出土したことも注目される。

これに対し後半期の着岸地は、出雲・伯耆など日本海の西方の海岸が多くなってくる。

## 6. 日本海を渡った文物、人

日本海を渡った文物で第 1 に挙げられるのは、豹や貂の皮である。727 年の第 1 回渤海使は、聖武天皇に 300 張もの貂皮を献上している。長屋王邸からも貂皮や豹皮を交易したことをうかがわせる木簡が出土している。豹の皮や貂の皮は身分の高い人しか使えなかったことから、貴族のステータスを衆目に誇示する格好のアイテムになっていたのだろう。

その他の渤海からの輸入品としては、朝鮮人参がある。正倉院にも新羅から購入したと

思われる朝鮮人参が残っている。また、蜜蝋（蜂蜜）も貴重品で、平城宮や京内から渤海産の蜂蜜などが入れられていたと思われる渤海産の土器類が出土している。

仏具も輸入されたらしく、奈良県高市郡明日香村の坂田寺跡から出土した渤海三彩の獣脚・盤・壺片は、聖武天皇と光明皇后の側近の坂田寺尼信勝が仏具として購入したものである。また、『仁和寺御室御物実録』には、「渤海金銅香鑪一具」の記載があるが、これは宇多天皇の愛蔵品の一つだったようだ。そして滋賀県大津市石山寺所蔵の『仏頂尊勝陀羅尼記』は、渤海使李居正が唐から日本にもたらしたということが奥書に書かれている。

また、江戸時代まで、日本の暦は中国の「長慶宣明暦」を使用していたが、これは平安時代に渤海使がもたらした暦をずっと使っていたものである。さらに、白居易の漢詩集である『新樂府』も多分渤海経由で日本にもたらされたものである。ほかにジャコウ鹿から取った麝香や南方産のウミガメの甲羅で作成した玳瑁酒盃も渤海経由でもたらされた。また、契丹大や渤海楽も入ってきた。

日本からの輸出品としては、綿、糸などの繊維製品が多い。さらに、舞女として女の人達が渤海に贈られている。

ほかに漢詩の交歓も盛んであった。空海と渤海大使王孝廉との詩の交歓が注目される。渤海使の応接には、漢文学に優れた者が任ぜられた。外交使節が詩宴の席で漢詩を詠むことは、国家の威信を懸けた「鬪筆」の場であり、それには当代随一の文人が当たった。その代表者が菅原道真であり、応接した渤海大使裴頌は、「七歩あるくごとに詩を一篇賦す」とされた人であった。こうした外交の場で話されていたのは漢語、つまり中国語である。渤海は多民族国家なので、国家を統一していくときに共通語として漢字と漢語が使われたのだろう。従って、日本側の通訳は皆、中国に行ったことがある人が充てられていた。

810 年には、高南容一行が渤海に帰国するときに、首領の高多仏が使節団から脱走して越前国に留まった。そこで「越中国の史生（書記）羽栗馬長と習語生、高多仏に学ぶ」と高多仏に渤海語を学習させている。この渤海語は高句麗語あるいは靺鞨語などのネイティブな言葉で、外交用の漢語ではないと考えられる。高多仏のように日本に亡命した渤海人は、920 年に最後の渤海使となった裴瑋が帰国するときに、4 名もの逃亡者が出ている。これは多分、渤海が滅亡する時期に当たったからだろう。

最後に注目される史料を一つ紹介しておく。宮内庁には、渤海から送られてきた外交文書が残っていることである。写しであるとはいえ、現存する日本最古の外交文書であることから大変重要である。

そして、926 年に渤海が滅亡すると、契丹の東丹国が成立するが、その東丹国から 929 年に裴瑋が再度来日する。しかし日本は裴瑋を「渤海の滅亡を手を拱いて契丹の軍門に下った「不忠不義」の使者」として追い返している。これをもって日本海をめぐる交流も終わりを告げるのである。